

令和6年度 全国学力・学習状況調査

調査結果

- | | | |
|---|---------------|---------|
| 1 | 調査の概要 | 1 ページ |
| 2 | 教科に関する調査結果 | 2～5 ページ |
| 3 | 質問紙調査に関する調査結果 | 5～8 ページ |
| 4 | 総括 | 9 ページ |

令和6年12月
羽幌町教育委員会

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果について

1 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象

- ① 小学校調査 小学校6学年
- ② 中学校調査 中学校3学年

(3) 調査の内容

① 児童生徒に関する調査

- 教科に対する調査
 - ・ 小学校調査（国語・算数）
 - ・ 中学校調査（国語・数学）

② 生活習慣や学習環境等に関する質問調査

- 児童生徒に対する調査
- 学校に対する調査

(4) 調査実施日

令和6年4月18日（木）

(5) 調査を実施した学校

○ 小学校（2校）

羽幌小学校、天売小学校

○ 中学校（3校）

羽幌中学校、天売中学校、焼尻中学校

2 教科に関する調査結果

(1) 教科に関する小学校調査の結果（国語、算数）

< 国語 >

学習指導要領に示されている

【知識及び技能】

- ① 言葉の特徴や使い方に関する事項
- ② 情報の扱い方に関する事項
- ③ 我が国の言語文化に関する事項

【思考力、判断力、表現力等】

- ① 話すこと・聞くこと
- ② 書くこと
- ③ 読むこと

に基づいた、選択式・短答式・記述式の3種類とした問題（14問）

■国語全体の平均正答率は全道・全国を下回っている。

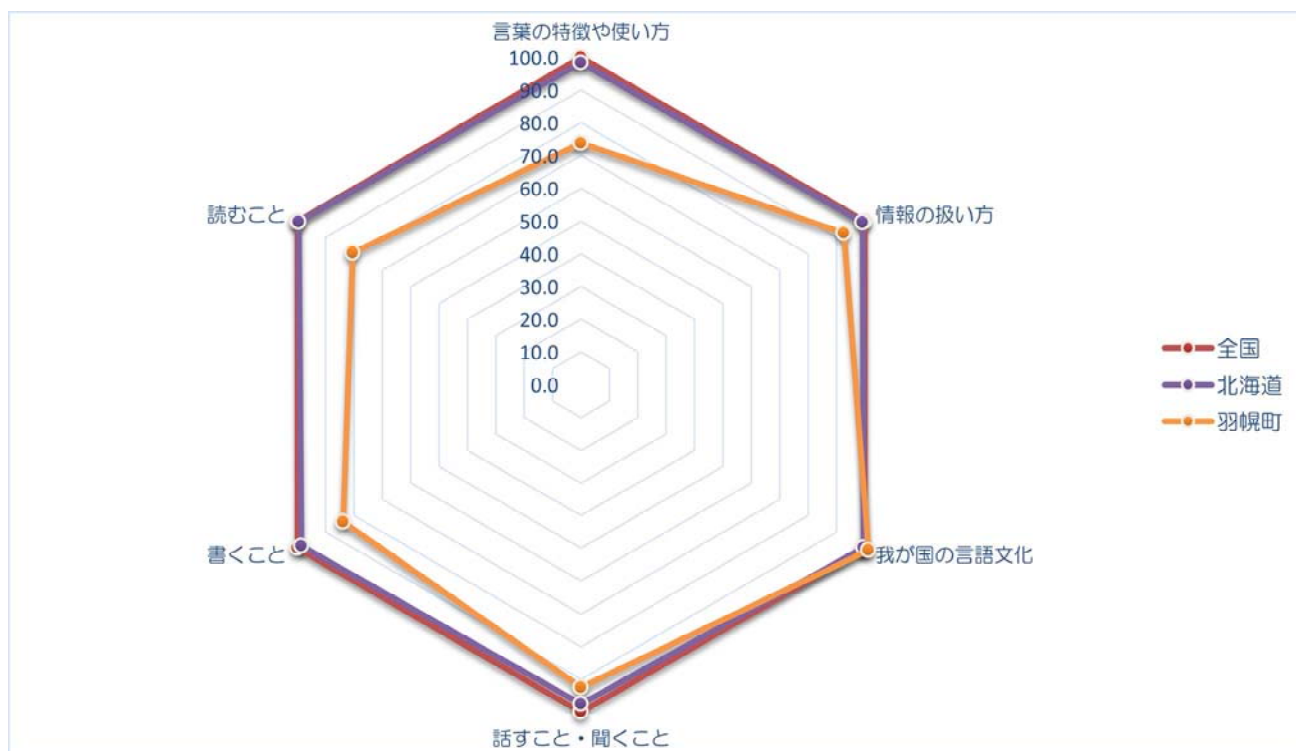
※令和5年度調査の国語全体についても全道・全国を下回っている。

【知識及び技能】

「我が国の言語文化に関する事項」は全道・全国を上回っているが、それ以外の項目は全道・全国を下回っている。

【思考力、判断力、表現力等】

全ての項目において全道・全国を下回っている。



全国の平均正答率を100とした場合の北海道及び羽幌町の状況をレーダーチャートで示したもの

< 算数 >

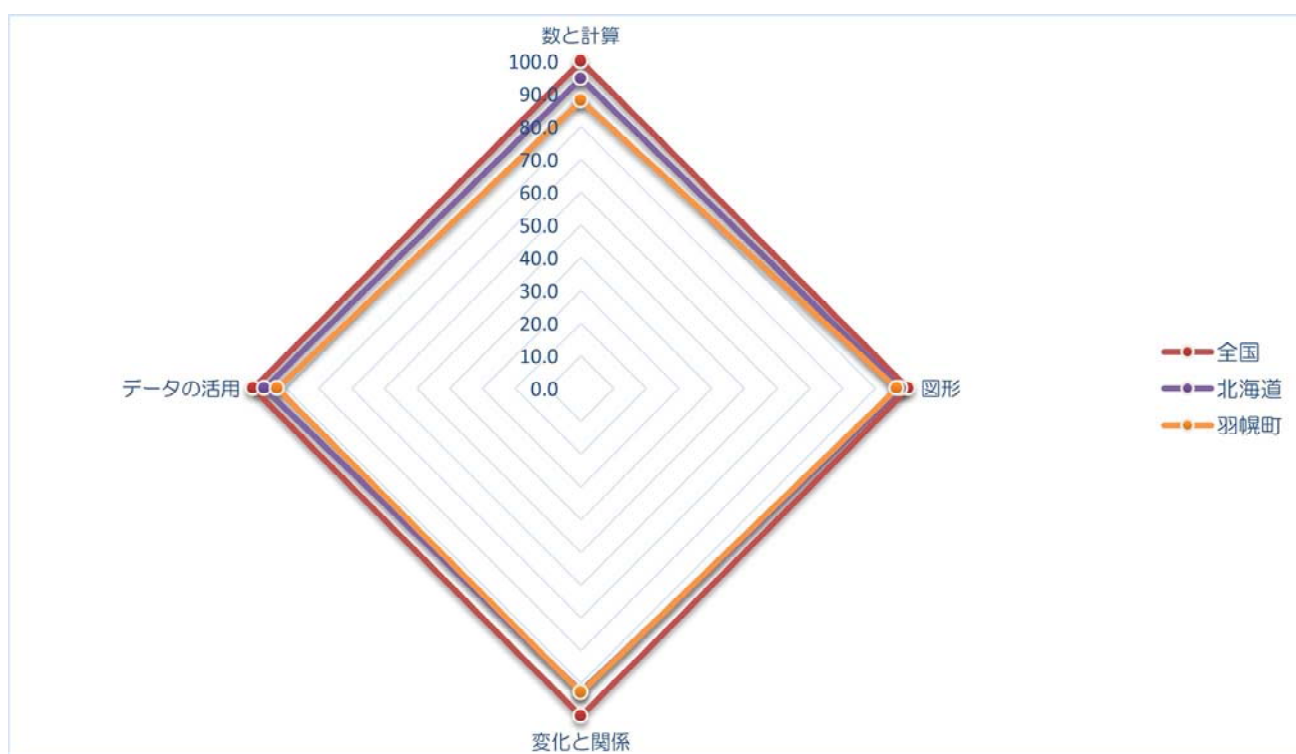
学習指導要領に示されている「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」に関わる問題（16問）

■算数全体の平均正答率は、全道・全国を下回っている。

※令和5年度調査の算数全体についても全道・全国を下回っている。

【図形、測定、変化と関係、データの活用】

- ・「測定」については設問なし。
- ・「変化と関係」のみ全道を上回っている（全国は下回っている）が、その他の項目については全道・全国を下回っている。



全国の平均正答率を100とした場合の北海道及び羽幌町の状況をレーダーチャートで示したもの

(2) 教科に関する中学校調査の結果（国語、数学）

< 国語 >

学習指導要領に示されている

【知識及び技能】

- ① 言葉の特徴や使い方に関する事項
- ② 情報の扱い方に関する事項
- ③ 我が国の言語文化に関する事項

【思考力、判断力、表現力等】

- ① 話すこと・聞くこと
- ② 書くこと
- ③ 読むこと

に基づいた、選択式・短答式・記述式の3種類とした問題（15問）

■国語全体の平均正答率は全道・全国を下回っている。

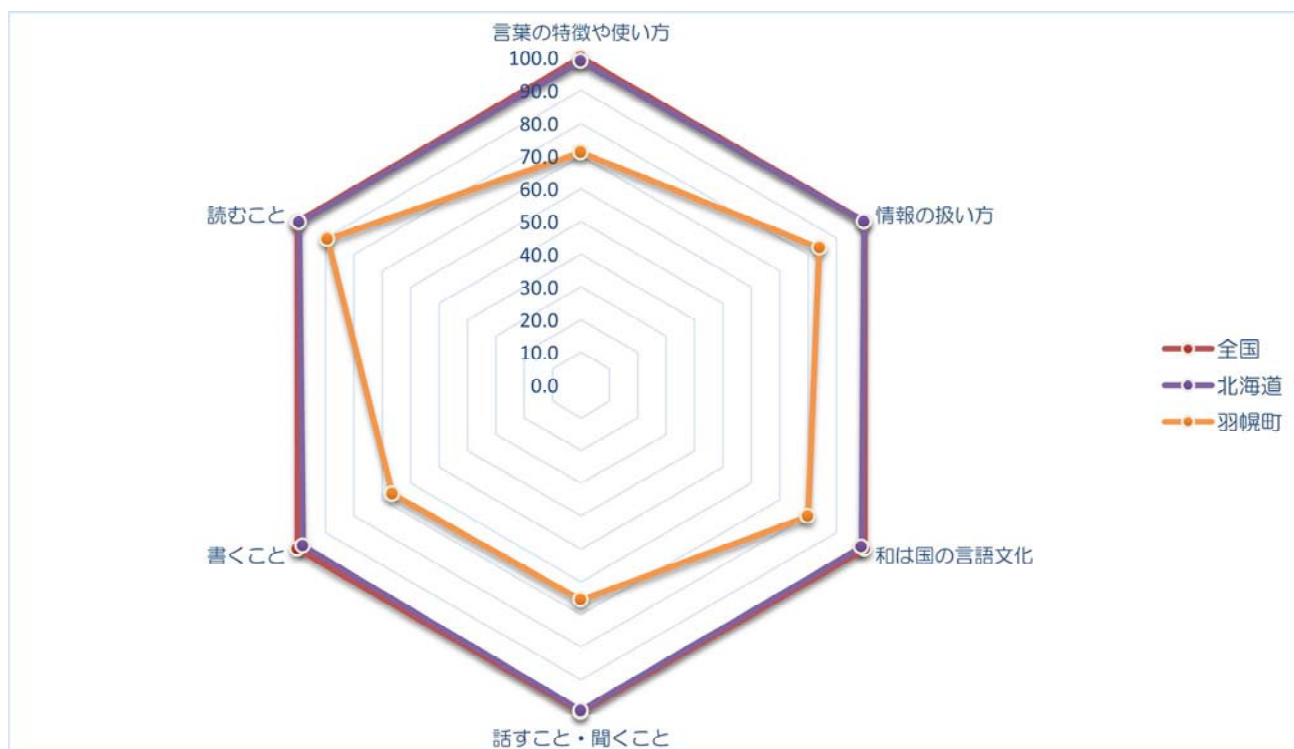
※令和5年度調査の国語全体についても全道・全国を下回っている。

【知識及び技能】

全ての項目において全道・全国を下回っている。

【思考力、判断力、表現力等】

全ての項目において全道・全国を下回っている。



全国の平均正答率を100とした場合の北海道及び羽幌町の状況をレーダーチャートで示したもの

< 数学 >

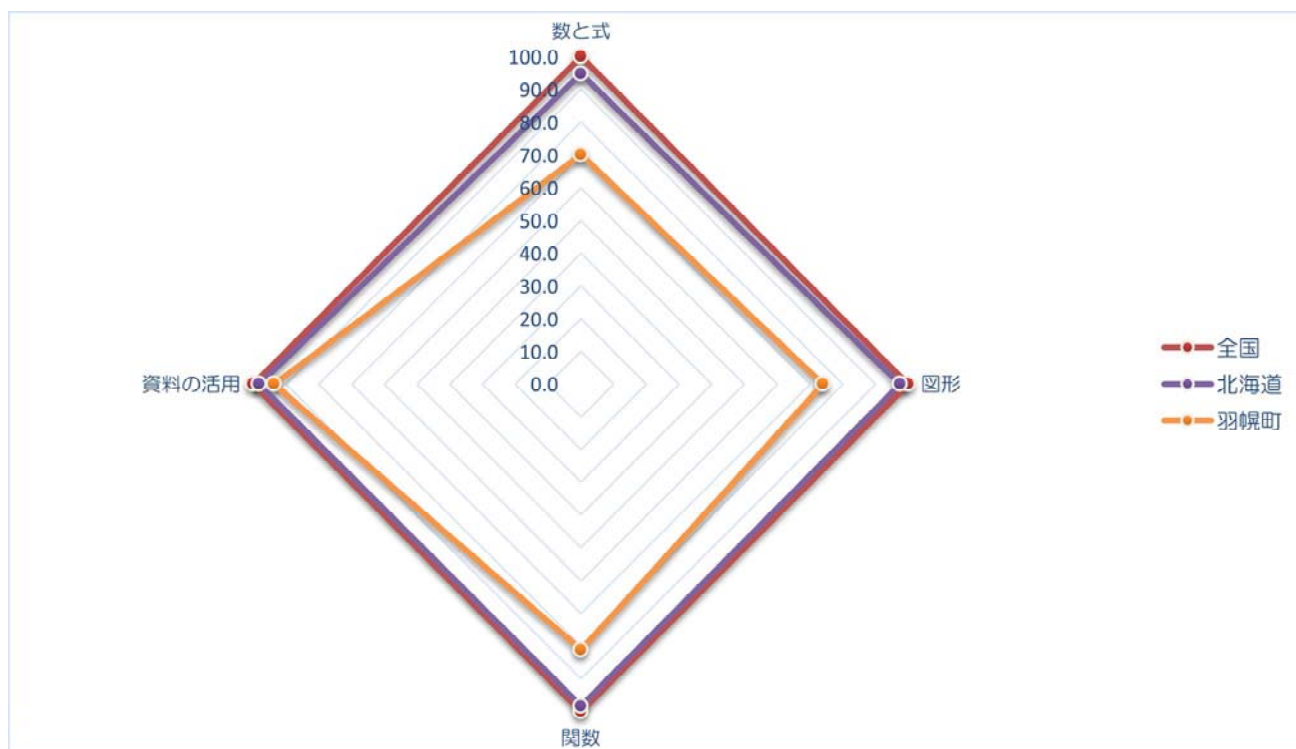
今後の学習において活用される基礎的・基本的な知識及び技能や、その知識及び技能の活用課程を基準とした「数と式」「図形」「関数」「資料の活用」の問題（16問）

■数学全体の平均正答率は、全道・全国を下回っている。

※令和5年度調査の数学全体についても全道・全国を下回っている。

【図形、測定、変化と関係、データの活用】

全ての項目において全道・全国を下回っている。



全国の平均正答率を100とした場合の北海道及び羽幌町の状況をレーダーチャートで示したもの

3 質問調査の結果

(1) 児童・生徒に関する質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する事項を主に、小学校63項目・中学校65項目について、児童・生徒に質問調査を実施

<全道・全国と比較した主な傾向：小学校>

【平日の家庭などでの過ごし方】

テレビゲーム、携帯電話、スマートフォンでのSNSや動画視聴（学習での使用は除く）を3時間以上する割合は高いが、勉強（学習塾、家庭教師等含む）を2時間以上する割合が低い傾向にある。家族と約束を守って携帯電話等を使用している割合に特段差は見られなかったことから、保護者による家庭学習の働きかけがさらに必要と考える。

【5年生までの授業環境】

ICT機器の使用頻度は低い傾向であるが、「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表を行った」、「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行った」と回答した割合が9割以上であることから、過去の授業により、かなりの児童の自主性が向上されている。

【日々の学習による応用力】

総合的な学習の時間を意欲的に行っていた割合が高いほか、「学習内容の見直しにより次の学習につなげられた」、「授業で学んだことを、次の学習や実生活に生かしている」と回答した割合が9割以上となった。また、「先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれている」と対象児童全員が回答したことから、教師陣の指導体制による効果が大きいと考える。

【国語について】

国語の勉強は好きと回答した割合が高い傾向であるほか、「授業で違う点や似ている点を意識したり図で示したりしながら情報を整理している」、「授業で目的に応じて話すために、集めた材料をいくつかのまとまりに分けたり結び付けたりしながら伝える内容を考えている」と回答した割合が9割5分以上と高水準となっている。これらの結果は「我が国の言語文化に関する事項」の平均正答率が全道・全国を上回った要因の一つとして挙げられる。

【算数について】

「授業内容を理解している」、「学習内容の活用方法を考えている」との回答した割合が高い傾向であり、「問題の解き方が分からないときはいろいろな方法を考える」、「授業で学習したことを今後の学習で活用したい」と回答した割合が9割以上となった。これらの結果は「変化と関係」の平均正答率が全道を上回った要因の一つとして挙げられる。

＜全道・全国と比較した主な傾向：中学校＞

【携帯電話等の使用頻度】

テレビゲーム、携帯電話、スマートフォンでのSNSや動画視聴（学習での使用は除く）を3時間以上する割合が高く、家族と約束を守って携帯電話等を使用している割合が低い。また、携帯電話等は持っているが家族との約束事はないと回答した割合も高いことから、家庭で好きな時間に好きなだけ携帯電話等を操作している生徒が多いと言える。

【授業以外の勉強時間】

授業以外で平日に勉強（学習塾、家庭教師等含む）を2時間以上する割合、及び土曜日や日曜日など学校が休みの日に勉強を2時間以上する割合が極端に低い傾向にある。全体的な学力の向上を図る上でも、生徒への家庭学習の習慣づけが今後大切となる。

【2年生までのICT機器の取扱い】

「ICT機器を自分のペースで理解しながら学習を進めることができた」、「ICT機器を友達と協力しながら学習を進めることができた」割合が高い一方で、「ICT機器を週3回以上使用した」、「ICT機器で自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができた」割合がやや低い傾向となったことから、ICT機器をさらに使いこなすためにも、使用頻度をさらに増やすことが重要と考える。

【国語について】

国語については全体的に肯定的な回答が多く、特に「国語の勉強が好き」、「国語の内容は理解できる」と回答した割合が非常に高い結果となった。しかしながら、学力調査の平均正答率は全道・全国に比べ下回っており、昨年度よりも差が広がっていることから、授業では内容を理解しているが、内容の定着が図られていない状態となっている。

【数学について】

数学が将来役に立つと回答した割合が高い一方で、数学が好きと回答した割合は低い数値となったことから、重要な科目と理解しつつも苦手意識がある生徒が多い傾向にあることがわかる。数学の内容は理解できる割合に特段差は見られなかったため、苦手意識の解消が学力の向上要因の一つとして挙げられる。

(2) 学校に関する質問調査

指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備状況等に関する調査

(授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況)に関する事項を主に、学校に質問調査を実施

<全道・全国と比較した主な傾向：小学校>

【スクールカウンセラー等との相談体制】

全国では「スクールカウンセラー等の教育相談に関して児童が相談したい時に相談できる体制となっている」との回答が9割以上（北海道は8割以上）であるが、当町は離島地区のみ相談体制がとれていない状況となっている。地理的条件が大きな要因ではあるが、ICT機器等を使用するなど可能な限り体制を整備するよう今後努めたい。

【教員・近隣中学校との連携】

「教員が授業で問題を抱えている場合そのことについて話し合いを行った」、「近隣等の中学校と教科の教育課程の接続や教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組をよく行った」との回答割合が高いことから、教員間および中学校との連携が非常に図られていると考える。

【6学年児童について】

「授業において自らの考えがうまく伝わるよう工夫して発表等を行っている」、「授業では自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っている」との回答割合が高く、学校側も児童の応用力の向上を認識していることが見受けられる。

【ICT 機器の使用頻度】

児童一人一人に配備された PC・タブレット端末の使用頻度については、羽幌町は使用頻度が高く、特に毎日持ち帰って利用させている割合が全道・全国が3割程度であるのに対し、羽幌町は全ての学校で毎日持ち帰って利用させているとの回答であった。また、特別な支援を要する児童に対して週3回以上使用している割合については、全道・全国が5割程度であるのに対し、羽幌町は全ての学校でほぼ毎日使用しているとの回答であったことから、ICT 機器を多くの用途で使用していることが判明した。

<全道・全国と比較した主な傾向：中学校>

【スクールカウンセラー等との相談体制】

全道・全国では「スクールカウンセラー等の教育相談に関して生徒が相談したい時に相談できる体制となっている」との回答が9割以上であるが、当町は離島地区のみ相談体制が満足とれていない状況となっている。地理的条件が大きな要因ではあるが、ICT 機器等を使用するなど可能な限り体制を整備するよう今後努めたい。

【3学年生徒について】

「前年度までに授業において生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れた」、「前年度までに家庭学習について、生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行った」との回答割合が低いため、生徒の応用力及び家庭学習の取組を向上させる体制が必要。

【近隣小学校との連携】

「近隣等の小学校と教科の教育課程の接続や教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組をよく行った」との問いに対し、羽幌町は全ての学校で取組を行ったと回答したことから、小学校との連携が非常に図られていると考える。

【ICT 機器の使用頻度】

生徒一人一人に配備された PC・タブレット端末については、授業等での調べものの際に「ほぼ毎日使用している」と全ての学校が回答した一方で、教員が前年度に大型提示装置等（プロジェクター、電子黒板等）を授業で使用した割合が低い傾向となった。今後は電子機器の導入を各校へ積極的に行い、授業体系の向上を図りたいと考える。

4 総括

今年度の全国学力・学習状況調査の結果について、小学校調査では国語・算数いずれも全道・全国の平均正答率を下回っているが、国語【我が国の言語文化に関する事項】分野は全道・全国平均を上回り、算数【変化と関係】分野についても全道平均を上回っている。また、全道・全国の平均正答率との差を令和5年度と比較すると、国語は拡大したが、算数は縮小している。小学校では児童の生活習慣や毎日の学習時間に課題がみられる状況であり、今後も継続して改善の取組を行う必要がある。

中学校調査では、国語・数学いずれも全道・全国の平均正答率を下回っており、どの分野においても平均正答率が全道・全国を上回ったものがない状況となった上、令和5年度と比較しても、特段状況に改善が見られない結果となった。中学校では生徒の応用力及び家庭学習の取組に課題がみられる状況であるため、生徒自身の意識を向上させる体制が必要と考える。

今後は、これらの調査及び分析結果に基づき、これまでの取組に係る成果を踏まえつつ、保護者や地域などの理解や協力を得ながら改善に向け積極的に取り組むなど、児童生徒の生活改善・意識の醸成を図り、総合的に学力向上へ取り組んでいく必要がある。